



## 徽宗"坐井觀天"の地: 依蘭冬紀行 (2) : 黒龍江省に セーブルロードの軌跡を求めて

著者	室田 武
雑誌名	經濟學論叢
巻	55
号	1
ページ	1-32
発行年	2003-06-30
権利	同志社大学經濟学会
URL	<a href="http://doi.org/10.14988/pa.2017.0000004584">http://doi.org/10.14988/pa.2017.0000004584</a>

# 徽宗 “ 坐井觀天 ” の地：依蘭冬紀行（ 2 ）

黒龍江省にセーブルロードの軌跡を求めて

室 田 武

## （ 2 ） のはじめに

本論考（ 1 ）では、かつての三姓、現・依蘭の現地訪問を中心にセーブルロードを考察した。その続編としての本論考（ 2 ）では、そこが遼の時代には五國城の地であったことに鑑み、まず、『遼史』に五國部がどう記載されているかを見る。クロテン毛皮を貢納品リストに含む五國部の遼王朝への朝貢の頻度などを、これによってある程度まで知ることができる。

次に後期セーブルロードの考察に移る。そこでは、前期セーブルロードの主な担い手がソグド商人であったのに対し、後期のある時期までの主な担い手は、ロシア商人を別とすれば女真商人であったことを、河内良弘『明代女真史の研究』を通じて跡づける。

さらに、20 世紀に入ってからの中東アジアにおけるセーブル (sable)、すなわちクロテン (黒貂、ロシア語では ) の棲息状況とそのイタチ科の小動物 (学名: *Martes zibellina*) の人間社会との関わりを、ロシアのアルセーニエフによる名著『デルスウ・ウザーラ』に即して見ることにする。

また、調査地の現状がどのようなものであるかを、21 世紀の資源・環境経済論の面から理解することも重要であるとの判断から、いわゆる「満州国」時代の依蘭と日本との関係、および 21 世紀初期の依蘭地域が目指している石炭化学工業振興の方向を、現地訪問時の伝聞や収集文献等を通じて述べる。

最後に、前期、後期を総合してのセーブルロード通史の構成にとって、今後

何が研究課題となるかを述べて結びとする。

## 1 『遼史』に見る五國部の遼王朝への進貢

本論考(1)において、今日の依蘭が、遼王朝の下では五國部の一つである越里吉部の地であったことを述べた。そこで本論考(2)では、まず、その五國部が遼に対してどのような政治的、ないしは経済的關係にあったのかを見ておきたい。

遼は、モンゴル高原東部の遊牧騎馬民族の一つである契丹族が建国した王朝(916-1125)である。多数の部族の連合体社会を成していた契丹族を、統一的な王朝建設にまで導いたのは、迭刺(てつら)部出身の耶律阿保機であった。彼に率いられての建国の年は、916年(延喜16)であり、その一族の故郷は、現在の中国・内モンゴル自治区の北東部であった。栄華を極めた唐は、既に907年に滅亡し、漢族の社会は混乱していた。その混乱を利用した遼は、今日の中国東北地方や華北地方からモンゴル高原の東南部にいたる広大な地域に勢力を拡大した。そうした遼の東北部分は黒龍江中流域まで伸びていた。

遼の第5代皇帝である景宗の長子・耶律隆緒は、12歳で即位し、第6代の皇帝・聖宗となった。彼は、母親や優れた補佐役に支えられ、国力のいっそうの充実に努めた。遼は、960年(天徳4、遼の応暦10)建国の宋と対立し、勢力を競っていたが、1004年(寛弘1、遼の統和22、宋の景德1)、聖宗は、自ら大軍を率いて宋の都・汴京(今日の河南省開封)へ進軍した。その遼軍は、汴京を陥落させるには至らなかったものの、黄河沿いの澶州にまで進出した。

宋の第3代皇帝・真宗は、その勢いに恐れをなし、同年、「澶淵(せんえん)の盟」を結んで遼と和解した。これは、軍事的な優勢を誇る遼にとって有利な条約で、歳幣として宋は、遼に対して毎年絹20万匹、銀10万両を贈るという一項を含んでいた。そればかりか遼は、モンゴル高原經由で西方の諸地域と行う交易からも多大な利益を引き出すことができた。聖宗は、東方に関しては高麗を降し、西方については党項(タングート)族の国・西夏(982-1227)と結んで西域諸

民族を朝貢させ、勢力範囲は、最大の時期にはペルシア方面にまで及んだ。

この遼の歴史を知るうえで重要な文献として『遼史』がある。これは、元の脱脱(とくと)という人物らが、勅を奉じて編纂した遼の正史で、1344年(康永3, 元の至正4)に完成した。中国諸王朝の正史の中では、完成度が低く、誤った記述も多いとされるが、今日の中国では、これに校勘記(刊行後に別の人が他の文献と照合するなどして、誤記、誤認等を訂正した補注)を付した五分冊本が市販されている。以下では、その中に五國部がどのように記録されているかを見てみる。遼史卷三十三は「嘗衛志下」で、遼国内の部族と国外の部族を列挙している。その中に聖宗三十四部という項があり、その最後に

五國部。剖阿里國，盆奴里國，奧里米國，越里篤國，越里吉國，聖宗時來附，命居本土，以鎮東北境，屬黃龍府都部署司。重熙六年，以越里吉人尚海等訴酋帥渾敵貪汚，罷五國酋帥，設節度使以領之。

という記載がある(『遼史二 志〔一〕』, p. 338)。そのおよその意味は、“五國部は上記の五つの部であり、それは聖宗の時代に遼に服属することになったので、遼は彼らが本土内に住み、東北地方の境界地帯を鎮める役割を与え、黄龍府都部署司の管轄下におくことにした。重熙六年、越里吉人の尚海らが、汚職の咎で首長の渾敵を訴えたので、彼を首長の座から罷免し、節度使を設けてその地を治めさせることにした。”ということであろう。

遼史卷三十五は「兵衛志中」で、そこには遼の軍隊の組織が、御帳親軍、官衛騎軍、大首領部族軍、衆部族軍に分けて記されている。これらのうち衆部族軍の項には、黄龍府都部署司があり、その下に隗衍突厥部、奥衍突厥部、北唐古部、五國部の四つが挙げられている(同上, p. 412)。

この『遼史』の本紀と部族表には、五國部に関する記載がかなり多くある。記載頁を《 》内に示しつつ、それらを時代順に列挙すると次のようになる。なお、遼の年代のあとの( )内の数値は西暦年代である。

統和二年 ( 984 )

五國隈烏古部節度使耶律隈注以所轄諸部難制請賜詔給劔仍便宜從事從之。《部族表，p. 1090》

統和二十一年 ( 1003 )

夏四月乙丑，女直遣使來貢。戊辰，兀惹，渤海，奧里米，越里篤，越里吉等五部遣使來貢。《本紀，p. 158》

統和二十二年 ( 1004 )

七月 蒲奴里，剖阿里等部來貢。《部族表，p. 1096》

開泰七年 ( 1018 )

三月辛丑，命東北越里篤，剖阿里，奧里米，蒲奴里，鐵驢等五部歲貢貂皮六萬五千，馬三百。《本紀，p. 183》

開泰七年 ( 1018 )

秋七月 ( 中略 )。丁卯，蒲奴里部來貢。《本紀，p. 183》

重熙十七年 ( 1048 )

伐蒲奴里酋陶得里。《部族表，p. 1106》

重熙十八年 ( 1049 )

五月 五國酋長各率其部來附。《部族表，p. 1107》

重熙二十一年 ( 1052 )

七月 遣使詣五國及鼻骨德烏古敵烈四部捕海東青鶻。《部族表，p. 1108》

清寧三年 ( 1057 )

春正月 ( 中略 )。乙未，五國部長來貢方物。《本紀，p. 255》

咸雍五年(1069)

十一月(中略). 丁丑, 五國剖阿里叛, 命蕭素颯討之. 《本紀, p. 269》

(なお, この蕭素颯の名は, 列傳第二十五に登場している. p. 1392)

咸雍六年(1070)

冬十月丁卯, 五國部長來朝. 《本紀, p. 270》

咸雍七年(1071)

三月己酉, 以討五國功, 加知黃龍府事蒲延, 懷化軍節度使高元紀, 易州觀察使高正並千牛衛上將軍, 五國節度使蕭陶蘇幹, 寧江州防禦使大榮並靜江軍節度使. 《本紀, p. 270》

大康四年(1078)

九月(中略). 庚子, 五國部長來貢. 《本紀, p. 281》

大康七年(1081)

春正月戊申, 五國部長來貢. 《本紀, p. 285》

大康八年(1082)

春(中略). 丁酉, 鐵驢, 五國諸長各貢方物. 《本紀, p. 286》

大康九年(1083)

九月(中略). 辛未, 五國部長來貢. 《本紀, p. 288》

大安元年(1085)

春正月(中略). 庚戌, 五國酋長來貢良馬. 《本紀, p. 290》

大安四年(1088)

正月 五國諸部長來貢. 《部族表, p. 1113》

壽隆三年

九月 五國部長來貢。《部族表，p. 1117》

壽隆五年

六月 五國部長來貢。《部族表，p. 1118》

壽隆六年

十月 五國諸部長來貢。《部族表，p. 1118》

乾統九年（1109）

四月 五國部來貢。《部族表，p. 1119》

乾統十年（1110）

四月 五國部來貢。《部族表，p. 1119》

天慶元年（1111）

三月 五國部長來貢。《部族表，p. 1119》

天慶二年（1112）

正月 五國部長來貢。《部族表，p. 1120》

もちろん、遼に來貢したのは五國部だけではない。女直（女真）、高麗などの來貢も頻繁であった。彼らが貢納品として遼に何をもたらしたのか、詳しい記述は無いことがほとんどである。とはいえ、1018年、すなわち遼の開泰7年の五國部の貢納品中に貂皮6万5000枚があることは注目に値する。

契丹族主導の遼王朝は、天祚帝の時代には弱体化し、1125年（天治2、宋の宣和7、金の天会3）、女真族主導の金と漢族主導の宋に滅ぼされる。その後の金と宋の間の抗争については、本論考（1）で記した通りである。すなわち、遼を滅

ぼして勢いづいた金は、宋都・汴京を陥落させて徽宗、欽宗らを捕囚とし、五國城（現・依蘭）に幽閉した。しかし、それで宋王朝が消滅したわけではなく、北方の金の力がおよばない今日の中国南部で王朝を維持した。それが南宋（1127-1270）で、それ以前は北宋（960-1127）と称される。

世界史上最大といつてよい地理的範囲にわたって、モンゴル族の勢力が広がる。その王朝が元である。その元も漢族の朱元璋を指導者とする勢力の台頭によって滅び、1368年（正平23）、明の建国となった。

金、北宋、南宋、元の下で、クロテンの生態やその毛皮の交易がどうなっていたのか、本論考の範囲では未調査である。以下で検討するのは、明王朝の下でのクロテンの毛皮交易である。

## 2 女真人による後期セーブルロードの展開

かつての金王朝の子孫であるともいえる女真人は、明の時代にはさまざまなグループをなして今日の中国東北地方にあたる広大な地域に分散して暮らしていた。さらに彼らの北方にもさまざまな民族が暮らしていた。そうした北方の民に対する明王朝の初期の対応ははっきりしないが、永楽帝の時代になると方針が定まった。すなわち明は、彼らと争うよりも招撫するほうが得策であると判断した。遼の場合と基本的に同じことであるが、彼らに來貢を求め、貢納品を持ってきたら、十分にもてなし、恩賞を与えて返す、という政策である。これについては、河内良弘の優れた研究があり、以下ではそこからの引用が多いことをあらかじめ断っておく。

朝貢を求めるには、そのための道筋をきちんとつけておく必要があった。この点に関し、永楽帝は、「洪武三十五年八月、劉貞を左都督に任じ、遼東に鎮守せしめ、凌雲を遼東都司都指揮僉事に任じ、孟善も遼東に鎮守せしめ、都司所屬が軍衛を節制せしめ、遼東支配の體制を固めた」（河内、1992、p. 16）。彼はまた、金王朝の子孫ということもできる女真人のいる各地に招撫使を送り、彼らの明王朝への帰属を促した。「その詔諭に應じ、永楽元年（1403）五月、女直



野人買里的・平住等二十九人が來朝し、同年九月、女直野人歸禿等二十二人がはじめて來朝し、同年十一月には頭目阿哈出が來朝して建州衛軍民指揮使司の開設となり、阿哈出が初代の指揮使に任ぜられた。同時に建州衛經歷司が設けられ、經歷一員が置かれている」(同上)。

「松花江流域の女真人に対しては、永樂元年十二月、忽刺温女直野人西陽哈の來朝を機會に兀者衛が設けられ、西陽哈・鎖失哈等が指揮使・指揮同知などに任ぜられたのをはじめ、永樂二・三年には、兀者左・右・後衛や兀者托温千戸所・兀者穩勉赤千戸所などが増設された。肥河衛はややおくれて永樂四年九月、嘔罕河衛は永樂六年正月に設置された。

また永樂七年四月、黑龍江下流の奴兒干地方の住民が來朝すると、同年閏四月には、黑龍江下流の特林(Tyr)の地に、奴兒干都指揮使司が開設され、經歷司も設置された。」(同上)

永樂十八年には、「都指揮使劉清が、吉林の船廠において造船し、松花江下流の經營に従事している」(同上, p. 17)。

「以上の如き永樂帝の積極的招撫によって、永樂年間には数多くの女真人が來朝した。來朝した女真人首長には指揮・千戸・百戸・鎮撫等の官が授けられ、任命のさいに勅書と印記を賜い、衛または所を開設せしめられた。こうして女真各衛と明國との間に君臣關係が成立した。」(同上)

『大明実録』を詳しく検討した河内良弘は、北方の諸民族の明への朝貢に関し、特に女真族の朝貢に注目すると、ある時期までは貢納品が馬以外に具体的に何であったか、記載がないという。方物という記載は、既に見たように『遼史』にあるが、この表現は『大明実録』にも使われている。しかし、それは貢納品一般を指す表現であって、内容はそれではわからないのである。ところが、成化年間(1465-1487)になると、貂皮の名が登場するという。それは、そのころ明国内で貂皮が大流行し始めたことと関係する、と見るのが妥当であるというのが河内の見解である(河内, 1992, pp. 593-594)。

貂皮需要の増大に伴い、「成化二年頃にいたって、女直の朝貢に際しては、遼

東の邊臣が、禮部の定めた‘名數’に即して、女真人の貢物を検査し、貂皮は純黒なるもの、馬は肥大なるものの持参者に限って入貢せしめ、しからざる者は、拒絶することとし」た(同上, p. 594). 明と女真族の間で、このような形で貂皮交易が隆盛をみるのである。

河内によれば、『萬曆野獲編』という書物には、「萬曆年間京師では、冬期には、貂皮をもって耳を温める習慣で、このため、皇帝は、臣下に貂皮を賜わるならわしであり、その費用は、數萬緡にのぼった」という旨の記載があるという(p. 595)。「明末の貂皮の需要量は、(中略)宮廷では毎年約一萬張、狐皮が約六萬餘張であったという」(pp. 595-596)。河内によると、明王朝は、正徳元年(1506)、「僕役、倡優、下賤等が、貂裘を着用するのを禁じているが、當時は、こうした下層社會の大衆にも、貂皮が普及するようになったのであろう。かように、民間で使用されたものを加えれば、女真から輸入された貂皮の数は、(上記に 筆注)示されたものよりは、はるかに増加したにちがいない。そして、こうした明國內での貂皮の流行と需要とが、成化年間以降の、明と女真との貂皮貿易を、長い年月にわたって、恒常的に繼續させた、要因であったと思う」(pp. 595-596)。

明で貂皮が流行し始めてから約10年後には、朝鮮でもその流行が始まった。李成桂による朝鮮の建国は1392年であるが、河内の考察では、在位1470-1494年の成宗の時代になるまでは、貂皮の使用は、ほぼ宮廷内に限られていた。しかも、宮廷の身分の高低により、貂皮の着用が許されない身分もあった(同上, p. 596)。ところが、成宗のころから女性を中心に、身分の高くない官吏の家や宮廷外でも着用する人々が急増したのである。その流行は、政府が禁止すれば止むようなものではなかった。『李朝成宗』にはその様子が描かれているといい、その記載はおよそ次のようなものであるという。

「現今の士大夫の家では、奢侈にふけり華美を誇り、そのはなはだしきに至っては、大小の宴會に、畫器に非ざれば用いず、婦女の服飾に貂裘がなければ共に會をなすを羞

じた。晝器は中國の所産で、その運搬は容易でないが、しかも家ごとに所持している。貂皮の多くは野人（女真人）から入手し、その交換として牛、馬、鐵製品を女真人に與えて惡弊を生じた。國家は貢物を量減したにもかかわらず弊害は以前の如くであった。貂皮の飾は三品以上にのみゆるされるさだめであったが、およそ帶銀者（四品以上）であれば、おおむね着用しており、混淆は禁じ難い。こうして貂皮の價は高くなり、敵人をして利あらしめるに至る」（河内，pp. 603-604）。

ここに示されているように、李氏朝鮮に貂皮もたらしたのは、明の場合と同じく、女真人であった。

こうした明と朝鮮の時代における貂皮交易に関し、そのルートは、河内によれば次のようなものであった。

「貂皮の主産地が、黒龍江以北のシベリア森林地帯、黒龍江省北部の叢林地帯であったため、中國や朝鮮で、貂皮の流行がおこると、これらの諸國の需要に應じ、貂皮は北方から南方へ活潑な流れを示し、その結果、シベリアから消費地に至る、長い交易ルートが成立した。その交易ルートには、明國に至るものと、朝鮮に至るものがあった。朝鮮に至るルートとしては、二者が存し、その一は、北方から伸びた交易路が、東京城地方を経て咸鏡北道に達するものであり、その二は、吉林、興京を経て満浦鎮に達するものであった。そしてこれらの交易路上の各所に女真人商人の活躍があった」（pp. 641-642）。

「朝鮮地方に通じる交易路のうち、最も繁栄したのは、東京城地方を経て、朝鮮の咸鏡北道に達するものである。このルートの末端、すなわち咸鏡北道にあっては、朝鮮の邊將あるいは商人は、貂皮の取引に際してまず五鎮城内の女真人と交渉を持つのが通例であった。」ここで五鎮とは、會寧、鍾城、穩城、慶源、慶興のことである。「五鎮城内の女真人は、朝鮮の需要に應じ、‘深处野人’から、貂皮・狼尾・土豹皮を買い求めたが、その場合に、商品の入手方法

としては二通りが存した。その一は、五鎮の女真人自身が生産地乃至は他の交易市場に赴く場合で」あった(p. 642)その交易圏は、「遠く松花江流域の忽刺温沅狄哈の地方に及び者があった」(p. 643)。ここで兀狄哈とは、ウデヘ族のことである。

河合がいう二通りのうちのもう一つの商品入手法は、次のようなものであった。すなわち、「貂皮貿易が恒常化し、商業ルートが固定化するにつれ、以上のような仕入れ人から品物を買取って販賣する商人等による、固定した交易市場が出現し始めた」(p. 643)ので、そうした市場で買い付けるという方法である。永安北道の穩城、慶源は、そのような市場の例で、それらは、毛皮等の一大集散地であったという。

女真商人の中には、一定のところに居を構えるものもいれば、絶えず商品買い付けに移動しているものもいて、前者の住居は後者の旅宿としても機能したようである。そして、群小の女真人の中には、牡丹江沿いの東京城地方の尼麻車部落や、それよりさらに北方の都骨部落の住民もいた(pp. 643-644)。

本論考が依蘭に焦点をあてるものである関係から、特に興味深いのは、都骨部落である。朝鮮の成宗 22年のある日、達生という人物が、造山塗の戦いで兀狄哈族に捕えられ、都骨部族の部落に連れ去られた。しかし彼は、その後脱出して朝鮮に逃げ帰った。彼が成宗に語った話が『李朝成宗』に収録されているといい、河内はそれを次のように解説している。

「達生の留置された兀狄哈の家は僧舎の如き外観を備え、屋内には犬銅釜が在って左右に配置され、一は炊飯の用となり、一は馬の飼料としての糝糠を調理するものであった。この家の兀狄哈は多くの綿布を蓄え、一人で貂鼠皮三百餘張を所有していた。達生は鶏鳴と共に起き、終日米をついた。一江を隔てた他種の兀狄哈が、皮革を持参し米に易え、二三日逗留し、二三駄に分載して帰ったという。(中略)達生のいた都骨部落は、依蘭(三姓)地方ではなかったかと思う。この地は一方では牡丹江を遡り、東京城を経て朝鮮に達し、一方では松花江を遡り、吉林を経て遼東に至る、交通の要衝に

當る」(pp. 645-646)。

達生のいた都骨部落を、河内が三姓の地と同定していることには根拠がある。つまり、『李朝成宗』の中に、都骨兀狄哈の位置は、朝鮮北境の造山からならば昼行十二日、夜行八日、尼麻車村落からならば北または東北方へ三・四日程の距離にあった旨が記されており、これに該当する集落として最も可能性の高いのは三姓（遼時代の五國頭城の跡地）ということになるのである。明の時代にはそこがウデヘ族の集落であったという点は興味深い。ウデヘ族は、女真族よりさらに北方の民族であるが、もし河内の推定が正しいとすれば、両民族が三姓において密接な接点を持っていたのである。

その都骨部落の富家は、「あたかも貂皮の原産地と消費地との中間に位し、狩猟民から貂皮を買い取り、他日朝鮮や明國での交易に備え、商品を保管している富者であって、商取引上の機能からみれば、問屋に近い性格をそなえていたと思う」(p. 646)と河内は述べている。

以上で概観したように、今日の中国東北地方の各地で貂皮交易に従事していた女真人は、それによって財力を蓄え、やがてはヌルハチを指導者として明を倒し、清の建国に至るのである。

### 3 20世紀初頭・沿海州のクロテン猟

女真族の子孫である満州族が建国した清王朝の下でのクロテン毛皮の交易については、日本の場合、多くの研究者による山丹交易に関する研究の中で、さまざまな形で言及されている。このため、本論考ではその考察は省略する。以下では、20世紀に入ってからのクロテン猟について、中国以外の事例を、ロシアのアルセーニエフによる名著『デルスウ・ウザーラ』から読み取ってみたい。

1907年（明治40）、ロシア極東軍の仕官アルセーニエフ（Vladimir Klavdierich Arsen év, 1879-1930）は、前年に続く2回目のウスリー（烏蘇里）地方探検の旅に出た。起点はウラジオストック（現代中国語では符拉迪沃斯托克、旧名・海参崴）

であったが、出発の前にデルスウ・ウザーラというナーナイ人の獵師と再会することができた(デルスウは呼び名、ウザーラが日本の姓にあたる)。というのは、前年1906年の探検旅行中に、彼はデルスウと偶然出会った。デルスウは、獵に限らず森の生活の達人であり、どういうわけか二人はとても気が合った。彼は、アルセーニエフ一行の案内役として活躍した。アルセーニエフは、翌年にも探検を予定していたので、別れ際に、来年のガイドも頼んだところ、デルスウは同意したのである。

そして1907年、二人はハバロフスク地方で再会し、2回目の探検行の起点としてのウラジオストックに向った。その際に、デルスウが語ったことの一部を、アルセーニエフは次のように記している。

「私はデルスウを大いに歓迎し、まる一日、われわれは話し合った。ゴリドは、冬にサンダ・ヴァクウ河の上流で二匹のクロテンをとり、それを中国人のところで毛布や斧や薬罐や茶わかしにかえ、残金で中国製の麻布を買って、それで新しいテントを手ずから縫ったことを話してきかせた。彼はロシア人の獵師から弾薬入れを買った。ウデへ族の女たちが彼に靴やズボンやシャツを縫ってくれた」(アルセーニエフ、1965、p.6)。

クロテン二匹の交換価値が相当に大きかったことが、これでよくわかる。なお、ここでゴリドとは、当時のロシア人がナーナイ人を指すときの表現である。そこでアルセーニエフは、ナーナイ人のデルスウのことを、ゴリドと記したりデルスウと記したりしているのである。

以上のようなデルスウとの再会から始まった探検中に、アルセーニエフは、朝鮮人もクロテン獵に従事していることを知り、その方法を詳しく観察した。そのことは次のように記されている。

「時はまさに秋であって、朝鮮人はもうクロテンとりをはじめていた。小屋から遠くないところで、われわれは<橋(モスト)>と呼ばれる、クロテンとりのわなをみた。

これを作るのに朝鮮人は岸から岸へかかった倒木を利用する。時には、適当と思われる場所に、そのような倒木のない場合、彼らはわざわざそのために木を切りたおす。幹の中央部あたりに小さな枝で柵がつくられ、それに狭い門があげられて、そこに垂直に、毛であまれた輪索がはられる。丸太の両側はなめらかに削られて、クロテンが柵をさけていけないようにしてある。輪索の一端は棒にゆわいつけられ、こん棒は刻み目によって軽く支柱にひっかかっている。この棒には三～四キロくらいの重さの錘(おもり)(石)がついている。クロテンはこのような<橋>をわたって走ってきて、どうしても迂回できず、柵の中へ入りこむ。そこで彼は輪索を通りぬけようとして、それをひっぱる。すると棒が支柱からはずれ、錘が水におちて、高価な猛獣を引きもどすのである。朝鮮人は彼らのクロテンとりのわなは正確にはたらし、クロテンのにげることなどないので、これがいちばんいい方法だと思っている。おまけに水中ではクロテンはよく保存され、カラスやカケスにやられることもない。朝鮮式のわなには中国式のそれと同様、リスやエゾライチョウ、その他の小鳥もよくかかる」(同上, pp. 143-144)。

ところで、朝鮮人だけがクロテン猟をしているのではなかった。ある日、アルサーニエフとデルスウがナハトフ川の河谷を歩いているとき、地面に足跡があった。それを見ただけでデルスウは、それがウデへ人のものであり、その人は「クロテンとりに従事しており、手には杖、斧、クロテンとりの網を持ち、歩きぶりから判断すると、若い男だ」(同上, p. 209)とアルサーニエフに告げた。二人がその足跡をたどると、仮小屋があって、そこにセンセリという名のウデへ人がいた。センセリは、持ち物も含めてデルスウが足跡から推定したとおりの男であった。彼は、その地域についてはデルスウより詳しい人物であることがわかったので、アルサーニエフは彼にガイドを頼んだ。そのときのことを、アルサーニエフは次のように記している。

「正午すぎヤンセリは、クロテンとりのわなのかけられた河沿いの小路へと、われわれを案内していった。私は案内人に、誰がここでクロテンをとっているのか、ときい

た。彼は、この場所は昔からウデへのモングリの縄張りだ(中略)と答えた。はたして、二キロもいかないうちに、われわれは一人の男をみたが、その男は、あるわなのそばに立って、一心にその中をしらべていた。シホテ・アリニの方角からやってくる人々をみるや、彼はまずびっくりして逃げようとしたが、ヤンセリを見つけると、たちまち安心した。こういう場合いつもそうするように、みんなはいっせいに立ちどまった。兵士たちは一服し、デルスウとウデへたちは何事が熱中して話しはじめた。

“どうしたんだね？”私はデルスウにきいた。

“満子(マンズ)(中国人)がクロテン、ぬすんだ”デルスウが答えた。

モングリの話によると、二日まえにこの路を通った中国人がわなからクロテンをとり出し、あとを元どおりにしておいたというのである。私は、わなにははじめから何もかかっていなかったのではないかと、という仮定を出した。するとモングリは血を指さした。クロテンがあばれたことの確認である。

“わなにかかったのはクロテンでなくて、リスかもしれないね？”私はまたきいた。

“いいや”モングリは答えた。“丸太がクロテンをおさえつけると、それはとめ棒を噛んで、齒のあとをのこすものだ”

そこで私は質問した。どうして泥棒は中国人だと思うのか、と。ウデへは答えた。クロテンをぬすんだ人物は、中国式の靴をはいていて、その踵には釘が一本かけている、と(中略)。

これらは完全に確認だった」(同上, pp. 212-213)。

こうした文章を読むとき、20世紀に入っても、北方の諸民族にとってクロテン猟がいかに重要な生業であったかがよくわかる。また、そうであるからこそ、同胞の一人が他人からクロテンを盗むということは、満州族の人々にとって恥ずべきことであった。この点に関し、アルセーニエフは、ウデへ人たちが盗みをはたらいたと見当をつけた満州人(アルセーニエフの言葉では中国人)を見つけ出したときのことを次のように記している。



「われわれを案内してきたウデへたちは、その中国人のところへ走りより、その靴をしらべたところ、釘が一つ足りなかった。そこで彼のリュックをほどこき、中からクロテンを取り出して、それから彼が盗みをはたらいた次第をこまかく説明した。その中国人はてっきり藪の中からみられたと思ひこみ、白状した。

ウデへは獲物をとりもどすと、それで満足して、しりぞいた。が、他の中国人たちはこれですまなかった。彼らはたがいにささやき合い、その罪をおかした者に宣告した。彼はみんなに恥をかかせた。だからナハトフを永久に去って、よそへいくべきである、と。罪人は無帽でそこに立っていたが、この判決をきいて、明日はこの河谷を去り、またとふたびこないだろう、と誓った」(同上, p. 215)。

冬になった。アルセーニエフとデルスウは、クスン川流域を訪ねた。かつて日本人が漁のために作り、その後放置したことのわかっている小屋を根拠地にして、ウデへたちが漁をしていた。そこで彼らは、前年に知り合いになったロガダという名のウデへ族の男と再会した。その晩、小屋の中にロガダの姿がない。心配したアルセーニエフが戸外を探し回ったところ、ロガダは小屋から五十歩ほど離れた岸辺の乾草の上に眠っていた。アルセーニエフは彼を起こし、寒くないのかとたずねた。そのときのことが次のように記されている。

「ロガダは、小屋は人が多くて狭く寒いので外で眠ることにしたのだと答えた。それからジャケットをびたりとかき合わせ、草の上に寝ころび、また眠ってしまった。私は小屋へもどって、デルスウに今のことを話した。

“しんばい、ない。カピタン”ゴリドは答えた。

“このひとたち、寒さ、おそれない。いつも山にくらし、クロテン、とる。夜がくると、そこに眠る。いつも月が彼の背中、あたためる。”(同上, pp. 236-237)。

クロテン猟で暮らす人々の生活ぶりを生き活きと伝える著作として、『デルスウ・ウザーラ』ほどの作品は、おそらく他にあまりないのではないか。月が背

中をあたためる，といった感性は，温帯にいたのでは身につかない．

ところで，デルスウは，アルセーニエフ一行の案内人ではあったが，四六時中一行と一緒にいたわけではない．森の民として単独行動をとることもあった．1907年1月のある日，彼が一人になっていたとき，何者かに襲われ，殺害された．彼が死亡しているのに気づいた人が，アルセーニエフに知らせた．アルセーニエフは直ちに現場に急行した．ロシア人とナーナイ人というまったく異なる文化の中で育った二人の間の友情は深く，そのような形での別れの場面は，読み通すのがつらい．映画界の巨匠・黒澤明の初めての外国映画『デルス・ウザーラ』が，この著作に基づくものであることはいままでもない．

#### 4 満鉄が目撃した三姓のオイルシェールと石炭

ここで改めて依蘭(三姓)に考察を移すと，そこに日本人の一部が強い関心をいだきはじめてのは江戸時代に入ってであろう．ただし，アイヌ人の場合は事情が異なるかもしれない．中国の歴史書に骨嵬などの名で登場する人々は彼らの祖先であった可能性がかなり高い．そして，13世紀から14世紀初頭にかけてサハリンに住んでいた骨嵬は，元と交戦状態にあった．彼らは，1297年には大陸に渡り，後の間宮林蔵と同じくキジ湖に至り，そこから黒龍江にまで達した．その一方で元軍は，同じころサハリン南端の白主に駐屯していた．こうした戦闘状態が終わったのは1308年のことである(海保，1994，p. 103；沈，1999，p. 19)．

このように，サハリンと大陸の間には，海峡をはさんだ諸民族間の交流が，戦闘も含めて古くから存在した(Vysokov, 1996)．ヨーロッパ人や日本人は，長い間にわたって，サハリンは大陸とつながる半島であると思っていた．それが島であることを，ロシアを含むヨーロッパ，そして日本にはじめて知らせたのが間宮林蔵であることはいままでもない．しかし，大陸側の諸民族，あるいはサハリンの骨嵬等は，それよりずっと昔から，それが島(中国の古地図などの表現では庫頁島)であることをよく知っていたのである．

江戸時代の日本の場合，松前藩経由で，当時の日本人には珍しい品々が，北

方から流入してきた。それらがいったいどこから来るのか、松前藩の中に関心をいだいて大陸まで渡った人が全くなかったとは断言できない。あるいは、徳川幕府自身が17世紀の段階で人を派遣した、ということが全くなかったとも断言できない。とはいえ、これまでに史実として確認されている範囲でいえば、山丹交易の実態を本格的に調査しようという目的で、サハリンから大陸北部への関心が日本で深まるのは、18世紀後半になってからのことである。そうした関心をいただいたのは幕府であり、このために最上徳内、中村小市郎、間宮林蔵らが次々と当時の言葉でいう北蝦夷地、後日の言葉で樺太、すなわち今日のサハリンに派遣され、彼らは、そこから先で何が起きているのかについて、交易従事者たちに詳しい聞き取り調査を行ったのである。本論考(1)で見たように、間宮林蔵の場合は、実際に大陸にまで渡った。ただ、彼の場合も三姓まで行ったわけではない。それでは近代になってからの日本と三姓の間には、何か関係があるのだろうか。以下ではこの点を検討する。

1868年の明治維新のころまでには、山丹交易は途絶えていた。ところが、明治維新以降の富国強兵政策の下、日清戦争、日露戦争は日本の勝利に終わった。この結果、交易を求めてというよりは、直接に中国東北地方での資源開発を構想する日本人が続出した。その構想実現に向けて、1906年(明治39)、南満州鉄道株式会社(以下、満鉄)が創設された。その初代総裁は、台湾総督府勤務を通じて植民地経営に関心をいただいた後藤新平(1857-1929)であった。これは、政府が資本金2億円のうち半額を出資する半官半民の会社であり、創設2年後の1908年には、早くも大連~長春間の本線および撫順支線と営口支線を広軌鉄道として開通させた。

ところで、日本の東北地方への進出は、経済開発にとどまらなかった。1931年(昭和8)、日本の関東軍は満州事変を引き起こし、満州侵略を開始した。軍中央部は関東軍の行動を追認したものの、関東軍の構想した満蒙領有案には反対した。この結果、関東軍は満州国を建国するという方向に路線転換した。日本の軍中央部はこれを支持し、清王朝の廢帝・愛新覺羅溥儀(1906-1967)を擁

立し、あたかも中華民国からの独立運動が現地人の中で進行しているかのように偽装し、1932年3月、溥儀を執政、元号を大同、首都を新京(現・吉林省長春市)にする新しい国として満州国が独立したことにした。そして9月、日本政府はそれを承認し、満州国との間に日満議定書を結んだ。これが日本の傀儡政権であったことは客観的に見て明らかである。このため現代中国ではそれを「偽満州国」と呼んでいることは、既に本論考(1)で述べた。

ところで、日本においては1920年代から石炭液化の研究が始まっていた。海軍燃料廠、満鉄中央研究所、朝鮮窒素株式会社がその中心であった。それらのうち満鉄中央研究所(在・大連)について見ると、それは、石炭液化、オイルシェール(油母頁岩)開発に重点を置いて調査・研究を進めていた。1932年の満州国成立後の中国東北地方においては、日本人が何をするのも自由という状態にあったから、満鉄は、容易に資源探査を各地で行うことができた。

上記の重点開発案のうち、ある程度まで具体化したのはである。すなわち、今日の遼寧省に位置する撫順炭田の石炭を液化することにして、実際、1939年(昭和14)にその工場が完成した。生産能力を年産2万トンとする工場であった。しかし、爆発事故などがあり、本格的な操業は1943年(昭和18)まで持ち越された。そして、約1000時間の連続運転に成功した。ところが、とても採算が合わないことが判明した。この工場の行方を、飯島孝という人は、「……石炭液化に使用せず、当時わが国が占領していた南方の原油を水添分解し、航空機用揮発油を製造するために転用された」と説明している(森川、1988、pp. 88-89)。

これに対してについてはどうであったか。撫順にオイルシェールのあることは、1910年(明治43)頃には判明していたという(森川、p. 83)。石炭層の上に油母頁岩層が乗っていたのである。それを乾留すれば液体燃料が得られると判断した満鉄の技術者たちは、そのための工場建設を提言し、実際、1929年(昭和4)に完成した。しかし、得られた液体燃料には、不純物が多いなどの問題があり、実用化には至らなかった。責任を感じた長谷川清二工場長は、1933年(昭和8)、ピストル自殺を遂げた(森川、p. 85)。

とはいえ、それでオイルシェール開発が中止になったわけではない。明治時代になってからの日本ではほとんど注目されることのなかった三姓の名が、そこで大きく浮上してきたのである。すなわち、1934年（昭和9）、三姓の中心街から松花江を約25km溯った川底で、油母頁岩の断片が採取された。発見者は、日本の航政局に属する浚渫船乗組員・植村湊であった。この断片は、試料として海軍経由で撫順炭鉱研究所に回された。そこでの分析により、含油率14.9%という高品位のオイルシェールであることが判明した（南満州鉄道株式会社調査部、1980、《原著1937頃》、p. 233）。

この分析結果を歓迎した満鉄の鉱業課計画係は、1936年（昭和11）12月、「日満両国に於ける燃料国策上三姓油母頁岩は極めて重要な資源にして之が実情を明にすることは現下の緊重要なれば昭和12年度に於ては其の全貌を明にする為現地調査に全力を注ぐ」という方針を發した（同上、p. 239）。そして、事業収支の予測まで含む工場建設計画が立案されたのである。上述の地域で次々と試掘もなされた。そうした試掘過程においてか、あるいは別の調査によるものか、本論考の範囲では不詳であるが、三姓には石炭も埋蔵されていることを満鉄は認識した。

しかし、結論からいえば、満鉄には、三姓のオイルシェールと石炭を本格的に利用するほどの能力はなかった。その一方で、朝鮮窒素株式会社も石炭液化の研究をしており、三姓石炭の液化を検討していた。だが、これも実現には至らず、吉林人造石油株式会社の手でメタノール生産工場の建設へと方針転換したのである（中井、2001、p. 12）。

1945年に日本が連合国に対して無条件降伏し、敗戦を迎えたのに伴い満州国も消滅した。ところで、それで日本と三姓、ないし依蘭との関係は永遠に消滅したのであろうか。結論からいえば、そうではない。この点を以下で見てみよう。そのために、まずは依蘭の位置する黒龍江省が現在どのような省であり、そこにおける依蘭がどのような県であるかを述べることにする。

## 5 黒龍江省、および依蘭県の現況

黒龍江省の面積は 45万km<sup>2</sup>余で、日本の国土面積の 1.2倍に近い。大陸性季節風気候を特徴とし、冬は寒冷で乾燥しているが、夏は高温・多雨となる。年平均気温は 1.3 と、日本に比べればかなり低い。年平均降水量は 589.6mmで、夏は多雨と記したものの、北海道を除く日本列島の梅雨や台風を考えると、むしろ少雨ともいえる。

そこに 3577万人の人々が住んでいる。日本の約 35%に相当する。多民族の省であり、漢族、満族、モンゴル族、朝鮮族、アラブ人、達斡尔族など 46 の民族が生活している。省都は、人口約 288万人の哈尔滨市である。

現代中国を前提としての国境と国内の省境との関係で、黒龍江省を見ると、この省の北部を黒龍江、すなわちアムール川が東に向かって流れ、その大河の北側はロシアのハバロフスク州やチタ州である。ユダヤ自治区もある。西部は内蒙古(モンゴル)自治区と、南部は吉林省と接している。東部は烏蘇里江、すなわちウスリー川を国境とし、川向うはロシアの沿海州である。

日本の地方行政では、都道府県が大きい単位で、その中に市町村がある。これに対し中国では、省(あるいは自治区)があつて、その中に市や県がある。そして、市は広い都市域を成し、その周囲に市より面積も人口も小さい県がある。県の中には鎮や郷がある。

私たちが 2002年 1月に訪ねた依蘭とは、以上のような意味での依蘭という県の中にあつて、県人民政府の所在地である依蘭鎮である。依蘭県全体について見ると、それは松花江の両側に広がる県である。周・王(1999, p. 17)によると、この県の面積は 4615km<sup>2</sup>で、人口は約 36万人である。その民族構成としては、漢族、満州族、朝鮮族、回族、モンゴル族が多い。行政的には、鎮の数が 7、郷の数が 10 で、それらに加えて朝鮮族郷が一つある。この県は、中国における満州族の故郷の一つである。

依蘭県は四囲を山々に囲まれており、中央部が低地になっている。県の西部

に松花江が流入して来て、北部から県外へ流出する。右岸からは牡丹江、そして倭肯河が合流して来る。依蘭鎮は、それら三つの河川に取り囲まれた松花江右岸沿いの鎮であり、水上交通の便に恵まれていることは、一目瞭然である。依蘭鎮の側から見て松花江の対岸も依蘭県の一部であり、その西北にある鉄力市方面から東南方向に流下して来る巴蘭河は、依蘭鎮対岸の町・迎蘭朝鮮族鎮の少し北方で松花江と合流している。

この県の経済活動の主体は農業であり、主な作物は小麦、トウモロコシ、大豆および水稲である。商品作物としては甜菜（テンサイ）、亜麻、煙草（タバコ）があり、特に亜麻は、黒龍江省の亜麻主産地の一つとして名高い。

依蘭県はまた森林資源が相対的に豊富な県である。主な樹種としては、紅松（チョウセンマツのこと）、黄波萝、水田柳が挙げられる。特用林産物としては、木耳（日本語のキクラゲ）、磨茹（日本語のシイタケ）、蜂蜜などがある。水産物としては、鯉（コイ）、鮎（日本の鮎《アユ》のことではなく、鯰《ナマズ》のこと。アユは中国語では香魚）、紅尾魚などが挙げられる。

鉱物資源も豊富で、主に石炭、石灰岩、鉄鉱石が挙げられる。特に石炭の埋蔵量は大きく、ほぼ全県にわたって石炭採掘がなされている。この炭鉱業に加えて、工業面では発電、食料加工、製糖、紡績、建材、機械工業が発達している。

これらに加えて、ハルビン石炭気化工場があり、その詳細については次節で述べるが、依蘭県のその工場からハルビン市まで 250km を超える石炭ガス・パイプラインが敷設されていることをあらかじめ記しておく。

## 6 依蘭県の鉱工業経済 - ハルビン石炭気化工場について

依蘭県は大規模な炭田のある地域であり、その豊富な石炭を原料とするものとしてハルビン石炭気化工場が立地している。そこでは、石炭ガス生産の副産物として、既にメタノールの生産も行われている。この工場がどんなものか、陳・趙（2001, pp. 179-181）の記述を、林永輝が日本語に粗訳したテキストを通常の日本語に書き改めると次のようになる。



「ハルビン石炭気化工場は“哈依煤気プロジェクト”の主要構成部分であり、ハルビン燃気化工総公司に属し、大型一類国有企業である。工場の敷地面積は100ヘクタール、建築面積は30万m<sup>2</sup>、総投資額14.95億元である。工場の規模は、同種の企業の中では、アジアの第1位で、世界の第3位に位置している。2001年現在、社員数は4032人である。

ハルビン石炭気化工場は1900年8月17日に起工され、1993年6月12日に第1期工事を完成し、試験的に石炭ガスを生産し始めた。同年7月28日に、正式にハルビン市に石炭ガスを輸送し、9月30日にメタノール装置は生産を開始し、所定の品質基準に達したメタノールを製造した。1994年8月に第2期工事は一回目で試験生産が成功し、2000年8月に国際標準化機構の品質認証ISO9002を取得した。

ハルビン石炭気化工場の固定資産は17.3億元である。2001年現在、生産装置は7セットがあり、各種主要な生産設備は2930台(セット)、計器・メータの数は11461台(セット)。圧力容器は586台(セット)、各種パイプの総延長は24.4万mである。

依蘭県には2.3億トンの石炭埋蔵量を有する依蘭炭鉱があり、ハルビン石炭気化工場は、その依蘭炭鉱の長焰炭を原料とし、都市ガス、メタノール、中油、軽油、初級フェノール(石炭酸)、タール、硫黄などの化学工業製品を生産している。

生産管理の面では、先進的なコンピューターコントロールシステムを採用し、大画面モニターが設置され、工場全体の安全かつ安定した運転を保証している。

原炭の供給については、原炭の貯蔵から、篩い分け、調整・組み合わせなどのプロセスを通じて、初級石炭ガス製造システム、熱供給及び発電システムに原料・燃料を提供する。このシステムは、洗炭、篩い分け、輸送などの段階に分けられ、年間の原炭処理能力は150万トンである。

初級石炭ガスの生産装置について見ると、それには、4mのPKM炉が5台あり、原炭を加圧・気化させる。また、産出した初級ガスからその中に含まれて



いるタール、中油、液体アンモニア、初級フェノールを分離・回収する。この装置は、ガス製造、加圧、フェノール回収、油水分離、生物化学処理などの段階に分けられ、初級ガスの生産能力は175000標準 $m^3$ /時である。

初級石炭ガス浄化措置について見ると、それは初級ガスを浄化して、基準に達する都市ガスを製造し、またメタノール合成に必要な原料気体を製造するものである。この装置は、変換、初冷、低温メタノール洗浄、アンモニア吸収式冷却、クロース硫黄回収、中央点火装置などの段階に分けられ、都市ガスの生産能力は280万 $m^3$ /日である。

メタノール合成装置について見ると、それは浄化ガスを原料としてメタノールを製造するものである。この装置は、脱硫、圧縮、合成、精留、冷却などの段階に分けられ、メタノールの生産能力は6万トン/年である。

給水システムについて見ると、それは、工場全体に生産、生活、消防用水を供給するものである。このシステムには2つの取水パイプがあり、水処理能力は10万トン/日であり、水質基準を満たす水を8万トン/日の割合で処理する。その他、このシステムには、能力10260トン/時の循環水システムが設置されている。

熱・電気供給システムについて見ると、それは工場全体の熱供給、電気供給、水蒸気供給の任務を担うものである。同時に、初級石炭ガスの生産装置に必要な水蒸気を供給する。このシステムは出力130トン/時の粉炭ボイラー（注：石炭を粉状にしたものを燃料にするボイラー）3基と、出力12000kWの発電機3基で構成され、設計年間発電量は2.16億kW時、水蒸気生産は160トン/時である。

空気分離装置についていうと、この装置は空気を酸素と窒素に分離させるものである。酸素は初級ガスの生産に供給し、窒素と空気は工場の計器、清掃用などに供給する。この装置は、空気分離能力10000 $m^3$ /時の設備2セットと6000 $m^3$ /時の設備1セットから構成され、酸素の製造能力は26000 $m^3$ /時である。

設備点検修理について見ると、このブロックは工場全体の設備、電気施設、パイプなどの修理修繕を担うものである。すなわち、古い部品の修理、部品の

製造と酸化防止処理などの業務を行う。

化学検査分析センターについて見ると、この検査センターは、原炭、各種の石炭、石炭ガス、メタノール、初級フェノールなどを検査・分析するものである。敷地面積は600m<sup>2</sup>、床面積は2700m<sup>2</sup>、現在、東北三省の中では最大規模で、かつ環境もよく、設備の完備した化学検査センターである。

計量計測センターについて見ると、このセンターは自動制御計器の検定、補正、修理などの業務を行っている。敷地面積は500m<sup>2</sup>、床面積は1600m<sup>2</sup>である。現在、計量項目は8項目、検定修理項目は156項目あり、この地域では、設備の完備した、かつ権威ある計測センターである。

建設されて以来、ハルビン気化工場は、科学技術の進歩を重視し、全面的に品質管理の強化と技術革新を行ってきた。「哈依牌」という商標をもつメタノールは、黒龍江省の優良製ブランドを受賞した。また、この工場は黒龍江省の压力容器設計・製造の許可書も取得している。

この10年間、化学工業部の“化工清潔文明工場”“第8次五ヶ年期間全国化工安全衛生先進工場”“『八五』化工環境保護先進工場”などの賞を受賞し、また、建設部の“全国都市石炭ガス安全管理先進工場”及び国家資料局の“資料管理1級合格証”を受賞し、ハルビン市の“精神文明建設標兵工場”を受賞した。」

高度な技術水準を誇るこの石炭気化工場は、中国独自の開発によるものではない。中井(2001, p.13)によると、それはドイツの協力の下で進められたものであるという。ハルビンまでのパイプラインは、日本の支援があったのだという。つまり、日本の敗戦から半世紀以上後になって、再び日本には、依蘭に注目する人々が登場してきたのである。

1997年、日本は中国と共同して東北地方における石炭液化の可能性調査に着手した。「候補地としては、内モンゴルの神木地域の石炭、昆明に近い先鋒地域の石炭、そして黒龍江省の依蘭地域の石炭が挙げたが、結局中国側の要望により依蘭炭で調査を行うことにした。神木炭は米国との協力、先鋒炭はドイツ

との協力となり、地理的な関係が興味深い」(中井, p. 12)。

三姓, すなわち依蘭の地下資源に対する日本の関心は, 満鉄時代の終焉とともに完全に消滅したかに思われた。しかし, 実際はそうではなかった。原油価格が安ければ石炭液化が採算ベースに乗る事業になることはありえない。これは, 世界の技術史の教訓である。にもかかわらず, 依蘭炭の液化を試みようとしている日中両国の狙いは何なのか。本論考の範囲では, この点は不明である。

なお, 本論考(1)において同三公路についてふれた。直線距離ではハバロフスクからそう遠くない黒龍江省北東部の同江市から始まり, 依蘭, 哈爾濱を通過し, 最終的には海南省のどこかまでをつなぐ, と聞いた高速道路のことである。依蘭訪問時には, あまりに途方もない話のような気がして, 本気にしなかったが, 帰国してから, 本当に中国はそういう高速道路を建設していることがわかった。“同”は, 本論考(1)で述べたとおり同江市のことだが, “三”は海南省最南端の都市・三亜のことである。2002年11月, 私は, 中国通貨史の研究のため, 海南省を訪ねる機会を得た。この時もまた林永輝, 泉留維と一緒にあった。五指山市にある民族博物館を見学するために, 海口からタクシーを雇ったが, 島の東部を走る真新しい高速道路の整備状況の良さには驚いた。ただし, それは同三公路ではないらしく, 島の中央部を開口から三亜に向けて走る高速道路が建設されていて, それがどうやら同三公路らしい。その旅から帰国後の12月下旬, 上海市でその上海周辺部分の開通式が挙行されたとのテレビ報道に接した。こうした高速道路の事例に象徴されるように, 現代中国の変容のスピードは極めて速い。

## 7 東シベリア, サハリンの最新クロテン事情

セープルロードを考察するといいいながら, 私はまだ野生のクロテンの生きた姿を見たことがない。その一方で, あちこちの博物館で剥製標本はよく見かける。記憶によく残っているだけでも, ハルビン市の黒龍江省博物館や, 後述するロシア連邦サハリン州において, ユジノ・サハリンスク市にあるサハリン郷

土博物館で見ている。

剥製以外については、ただ一度だけだが、雪の上の足跡を見る機会を得たことがある。1998年11月下旬、既に厳冬期に入っていたロシア連邦プリアチア共和国北東部のアラ川渓谷においてである。その渓谷の一角には温泉が湧き出しているが、冬は人気のまったくない入浴用の建物のところから少し川沿いをさかのぼった渓谷沿いの森の中だったが、落葉広葉樹中心の森で、しかもかなりの積雪があったから、林内は明るかった。その雪の上にかわいらしい小さな足跡が点々とアラ川の方へ続いていた。案内してくださったプリアート人のセンゲさんにたずねて、それがソーバリ( ), すなわちクロテンのものであることを知ったのである。

そのように、今もクロテンが棲息しているロシアのバイカル地方北東部の調査にその時日本から同行してくれたのは、三俣学氏(当時・同志社大学大学院経済学研究科博士前期課程2年)であった。プリアチア共和国の首都ウラン・ウデからバルグジン川の上流域近くまでの現地調査行きを可能にしてくれたのは、プリアート・サイエンス・センター所属の若い地質学者ゲナディさんであり、露英通訳としてサーシャ君という青年が同行してくれた。

上述のアラ川は、バイカル湖に注ぐバルグジン川の右岸の支流の一つであり、その源流はバルグジン山脈の東側斜面にある。ロシアでは、クロテンを“走るダイヤモンド”と称することがあったという。そして、黒い光沢の美しさ、柔らかさなどの点で、世界最高品位の毛皮が得られたクロテンの棲息地が、まさにそのバルグジン地方であった。

1917年の「ロシア10月革命」の直前、といてよい1916年、帝政ロシアは、バルグジン山脈西側斜面からバイカル湖岸に至る一帯をロシア史上初の「自然保護区」に指定した。自然保護というと聞こえはよいが、何のことはない、それまでの乱獲でめっきり数の減った野生のクロテンの絶滅を防ぐためであった。帝政ロシアはソ連となり、今ではロシア連邦となっている。その現代ロシアにおいても、そこは「バルグジンスキー生物圏保護区」として最も厳重に国家保

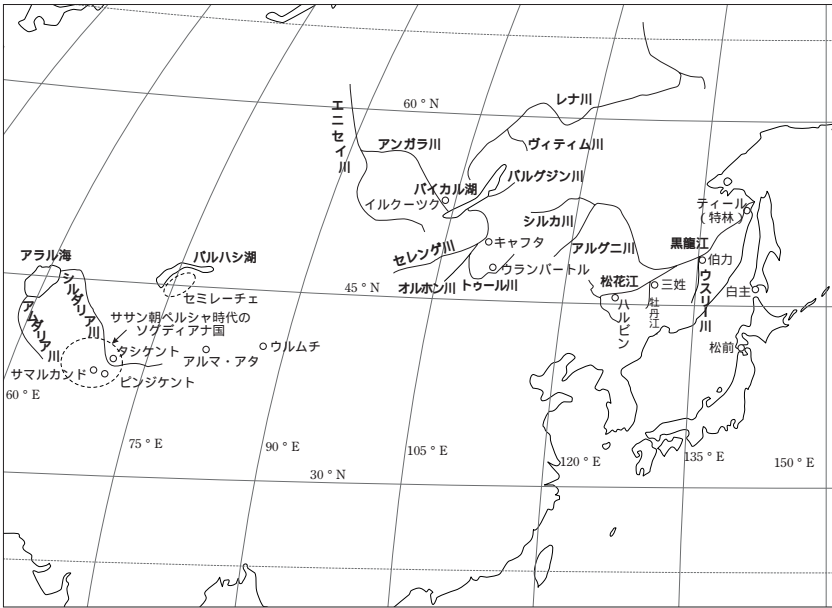
護された地域である ( , 1998, 107-108 ).

私と三保氏は、期せずして、その山脈東側斜面の渓谷でクロテンの足跡を見たわけである。現地を案内してくれた先述のセンゲさんは教育者であり、アラ川渓谷沿いの約 15kmにわたる細道を「エコロジー・トレイル」と命名し、少年少女たちをそこに案内し、日本流に言えば「環境教育」に相当する仕事をそこで展開している。

ロシアについてさらにいえば、今日のサハリンにも野生のクロテンがいくらかは棲息しているようである。2002年 8 月上旬、私は、サハリン北部のオ八市を訪ねる機会を得た。省都コジノサハリンスクから、まずは列車で北を旨とした。もとはといえば日本が建設した狭軌の鉄道の終点はノグリキであり、そこまで車中泊 1 泊の旅であった。そこからは乗合バスで未舗装の凸凹道を約 5 時間揺られ、オ八に着いた。

オ八訪問の主目的は、オ八油田の見学と、海外資本を導入してのサハリン 2 海底ガス田の開発現況についてのヒアリングであったが、これについては別の機会に記す。その旅の帰途は、オ八からノグリキまでは乗合タクシーで約 3 時間半、ノグリキからは再び列車であった。

このサハリン調査旅行は、同志社大学学術フロンティア研究プロジェクトにおける私の共同研究者タマラ・ハンタシキーヴァ氏（ロシア科学アカデミー地理学研究所・モスクワ）が準備し、同行してくれたものである。そこで上述の帰途のあちこちで彼女に通訳してもらい、サハリンのクロテンについて、数人のロシア人に質問をした。それによると、誰でもクロテンがどういう動物かを知っている。また、今でもサハリンにはある程度棲息している、とのことであった。ただし、数年前に、ノグリキ周辺で広大な地域にわたる森林火災があり、多数のクロテンが火を逃れて森から抜け出し、結局は死んだ、ということであった。もしこの話が本当であるならば、21世紀に入った今もサハリンの森林には、少数かもしれないが、野生のままのクロテンが棲息しているのであろう。



第 1 図 セープルロードの東西の広がり

## おわりに

世界的に見て、シルクロード研究の蓄積は厚い。セープルロードについても、さらなる光があてられてよいのではないか。これが本論考に着手した動機である。第 1 図にその東西方向の地理的広がりの概要を示したセープルロードは、ソグディアナと渤海の時代に遡る古い歴史を持っている。14世紀末までを前半とすれば、15世紀から今日に至る時代を後期とするセープルロードを、通史として明らかにする作業が必要と思われる。前期セープルロードについていえば、ソグディアナ国とソグド人の歴史の把握が不可欠となる。この点に関し、たとえば Marshak and Negmatov (1996, p. 238) には、

「(ソグディアナでは-筆者注)絹の機織が6世紀末期から7世紀初期にかけてはじまっていた。そして8世紀までには、ソグドの絹は、いわゆる‘絹の道’で既に重要な役割を果たしていた。6世紀から7世紀にかけて、北西ヨーロッパへと至る‘毛皮の道’もまた、ソグドの商人とホラズムの商人の手中にあった。そのことは、彼らの地の北方で発見されたビザンチンとイランの銀の器類にソグド人とホラズム人の所有者名が印刻されていることからわかる。彼らはそうした器類を毛皮との交換で入手したのである」

という記述がある。とはいえ、活動範囲が極めて広範であったソグド商人の歴史の全体像を明らかにする作業は簡単ではない。ロシア人による毛皮交易の歴史(Martin, 1988)を見ると、ソグド人の場合と同じく起源が古い一方で、ソグドの例とは異なり、現代までクロテン毛皮交易が続いている。

前期・後期の全体にわたってセーブルロードの歴史地理、経済地理、そして生物多様性を重視するエコロジー経済的研究を進めるには、ロシア連邦や中央アジア諸国でのこれまでの研究をまず整理することが大切であろう。後期セーブルロードに間接的に関係する山丹交易についてだけいえば、北海道開拓記念館による「北の歴史・文化交流研究事業」(1990-1994年度)において、日本、中国、ロシアの異なる分野に属する専門家が、ある程度まで視点を共有しながら研究を進め、既に多大な成果が得られている。このような前例を生かす形で、中央アジアから北東アジアを経て日本列島にまで至るアジア規模でのセーブルロードに関する国際共同研究が、いつか実現することを期待したい。

## 謝 辞

本論考(1)において記したように、中国黒龍江省および吉林省への現地調査旅行(2002年1月)は、同志社大学学術奨励研究費の助成によって可能になった。調査同行者の林永輝氏(2002年当時・同志社大学大学院総合政策科学研究科博士後期課程、現・積水樹脂株式会社)には、両省内各地の案内、通訳、帰国後の中国語文献読解補助など、多大なお世話になった。

本論考(2)の記述の一部は、上記のプロジェクト以外に、同志社大学学術フロンティア研究プロジェクト(ワールドワイドビジネスの企業行動に関する経済的な研究)、および日本学術振興会「未来開拓学術研究推進事業“Research for the Future” Program」(プロジェクト番号 JSPS-RFTF97I00602 プロジェクト名 地球環境情報収集の方法の確立～総合調査マニュアルの作成に向けて～;代表、和田英太郎)の研究助成によっている。

本論考(1)(2)全体を通じて、写真および地図のデジタル画像処理については、研究室アシスタントの春木千琴氏の多大な助力を得ることができた。

以上すべてのプロジェクト、ならびに個人に厚く感謝する。



